

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	伊 勢 本 大
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
「教師である」ことをめぐる教師の解釈実践に関する教育社会学的研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	山 田	浩 之
審査委員	教 授	丸 山	恭 司
審査委員	教 授	曾余田	浩 史
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は学校現場で働いた経験を有する教師たちを対象としたライフヒストリー・インタビューの中で、研究協力者によって「教師である」という物語がいかにか構成されるのかを明らかにしたものである。</p> <p>教師に対する世間のまなざしが錯綜する今日において「教師である (being a teacher) とはどういうことなのか」という根源的な問いへの社会学的な洞察が必要になる。教育社会学に関する先行研究は、これまで教師の職業アイデンティティに関する「形成」と「特徴」を明らかにすることで、この問いに答えようとしてきた。しかしそこでの議論は、教師たちが一枚岩的で本質的な職業アイデンティティしか持ち得ていない、といった誤った理解を促すという限界と課題を常に抱えてきた。それを乗り越えるため、本論文は職業アイデンティティを表す教師のストーリー、つまり〈語り〉にアプローチしようとしたものである。</p> <p>第1章では、これまで蓄積されてきた教育社会学に関する教師を対象とした研究を整理することで、過去から今日にかけて教師に向けられるまなざしや教師を取り巻く問題がいかにか変化してきたのか、また、そのことに教育社会学に関する研究がいかにか対峙してきたのかを明らかにした。そしてその上で、教師研究の文脈の中に本論文の取組みを位置づけた。</p> <p>第2章では、分析に先駆け、インタビュー内のやりとりから構成される研究協力者である教師たちの〈語り〉を、どのように解釈＝記述することができるのか、このことに関連する先行研究を整理し、これまで蓄積されてきた教育社会学における質的な研究の理論的検討を行うことで、本研究の方法と〈語り〉の分析に関する枠組みを明確にした。</p> <p>第3章では、本研究の中心課題となる「教師であるとはどういうことなのか」という問いに対して、研究協力者である公立小中学校の教師たちの〈語り〉によって、その物語がいかにか表現され、形づくられていくのかを分析した。分析の結果、研究協力者たちがある共通した参照枠、共有されたストックとしての「献身的教師像」を用いて「教師である」ことを語っていることが明らかとなった。</p> <p>第4章では、研究協力者が共通して用いた「献身的教師像」に関する物語と教師個人の</p>			

〈語り〉の関係について考察した。具体的には「教師は子どもを理解しなければならない」といった「献身的教師像」によって形づくられる公共の言説（＝《教師批判言説》）を教師自身がいかに関与するのかに着目した。その結果、「献身的教師像」からなる物語への対抗クレームを示しながらも、そうした論理へと共振せざるを得なくなってしまう教師の〈語り〉が示された。それは、研究協力者の《教師批判言説》に向けた懐疑的な解釈を、必ずしも本人の本意ではない〈語り〉へ導くというパラドキシカルな帰結を招くものであった。

第5章では、現職の教師ではなく、休職や離職経験を有する研究協力者たちに着目し、「教師であったとはどういうことなのか」という物語をライフヒストリー・インタビューの中でいかに関与するのかについて考察を行った。インタビューでは、休職／離職へ至る〈語り〉が示される際も、共通して自らの実践が「子どものため」にあることを主張する論理が構成された。

終章では本研究の知見と意義をまとめるとともに、教師の働き方改革など労働環境の改善などに対する示唆が述べられている。

本論文は以下の点で高く評価できる。

第1に、これまで日本の先行研究において所与のものと考えられてきた教師の職業アイデンティティに対する理解を、研究協力者たちの〈語り〉から捉え直す視座と結果を提示してみせたことである。本論文が明らかにしているのは、職業アイデンティティに関する議論が有してきた限界であり、またその中で看過されてきた「教師である」という「複雑性」への問いに目を向けることの重要性である。

第2に、教師という職業を表象するために不可欠な共有されたストックとしての言語的資源が使用される場合も、その用語法(イディオム)は文脈によって揺れや差異が表れ、一人ひとりの「教師である」という個別の物語が、それぞれ異なる形で紡がれていることを示したことである。それはこれまで教師のライフヒストリー研究が看過していたことでもある。この点を、教師たちの〈語り〉にもとづき論じたことは大きな意義を持つ。

第3に、本論文の知見にもとづき、学校の働き方改革に対する実践的示唆も展開している点である。教師の長時間労働の問題改善については、学校現場の働き方を見直すという方向で現在議論が進められているが、本論文が示唆したように「献身的教師」についての言語的資源が共通して用いられる教師たちの現実に鑑みた場合、労働形態にアプローチする制度的な改革のみでは、望ましい結果が見込めないことが予想される。教師たちに共有されたストックとしての「献身的教師像」から語られる「教師である」という物語とはまた別の、オルタナティブな〈語り〉も肯定される可能性を今後研究として拓いていくことが求められる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和2年2月10日